

5. ピーマン

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	(銅水和剤) Zボルドー	散布	-	-	野菜類(キャベツを除く)

・殺菌剤(参考農薬)

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
11+M5	アミスターオブティフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
24+M1	カスミンボルドー	散布	収穫前日まで	5回以内	
M1	(銅水和剤) コサイド3000	散布	-	-	野菜類
NC+M1	ジーファイン水和剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類(なすを除く)
11	ストロビーフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
M5	ダコニール1000	散布	収穫前日まで	3回以内	
19	ポリオキシシAL乳剤	散布	収穫開始 14 日前まで	5回以内	
2	ロブラール水和剤	散布	収穫前日まで	4回以内	

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	アーデント水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
1	アドバンテージ粒剤	植穴処理	定植時	1回	
4	アドマイヤー顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	(施設栽培)
6	アフーム乳剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
29	ウララDF	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	ギフパール	放飼	発生初期	-	(施設栽培)
1	スプラサイド水和剤	散布	収穫 14 日前まで	3回以内	
-	スワルスキー	放飼	発生直前～ 発生初期	-	野菜類 (施設栽培)
25	ダニコングフロアブル	散布	収穫前日まで	1回	
28	フェニックス顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
1	マラソン乳剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
1	マラバッサ乳剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	2回以内	

・殺虫剤(参考農薬)

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	アクタラ顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
11	エスマルクDF	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	-	野菜類
13	コテツフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
5	スピノエース顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
4	ダントツ水溶剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
4	バストガード水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
18	マトリックフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決めているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける(「薬剤抵抗性管理」参照)。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

病害虫名 (F : 菌類病、B : 細菌病、V : ウイルス病、O : その他の病原体)

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
苗立枯病 (F)	は 種 前	1. 無病床土を用いる。	
萎 凋 病 (F) 半身萎凋病 (F) 疫 病 (立枯性) (F) 青 枯 病 (B)	は種、定植前	1. 土壌消毒の項を参照し、対象病害に登録のある薬剤を用いる。 2. ナス科作物を連作しない。排水を良好にする。 3. 疫病、青枯病には、抵抗性台木を接木する。	1. 7～8月に発病が多い。 2. 疫病は、排水の悪い所で発病しやすいので、土地の選定、高畦などを考える。 3. これらの土壌病害は「ピーマン(カラーピーマンを含む)に発生する土壌病害の診断法」により簡易診断できる。詳細は農業農村支援センターへ問い合わせる。
灰色かび病 (F)	8月中旬～ 10月上旬	[参考農薬] 1. ロブラール水和剤 1,000～1,500 倍液を散布する。	1. 施設では、通風を図る。
うどんこ病 (F)	生 育 期 間	[参考農薬] 1. ポリオキシンAL乳剤 500～1,000 倍液、ジーファイン水和剤 750～1,000 倍液、カスミンボルドー1,000 倍液、ストロビーフロアブル 3,000 倍液のいずれかを散布する。	1. ジーファインは、施設では高温多湿時に散布しない(薬害)。 2. Q o I 剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。
炭 疽 病 (F)	生 育 期 間	[参考農薬] 1. アミスターオプティフロアブル、又はダコニール 1 0 0 0 の 1,000 倍液を散布する。	1. 炭疽病は、簡易検査法で診断できる。詳細は、農業農村支援センターへ問い合わせる。
斑点細菌病 (B)	6月下旬～ 9月中旬	1. Zボルドー500 倍液を散布する。 [参考農薬] 1. カスミンボルドー1,000 倍液、又はコサイド 3 0 0 0 の 2,000 倍液を散布する。	1. 降雨が続くと発生しやすいので、予防散布する。
モザイク病 (V)	定 植 前	1. PMM o V に対しては、抵抗性品種を採用する。	
	生 育 期 間	1. アブラムシ類を防除する。 2. 発病株は、抜き取り処分する。	
黄化えそ病 (TSWV) えそ斑紋病 (INSV) (V)	生 育 期 間	1. アザミウマ類の防除を徹底する。 2. 発病株は抜き取り、ほ場外に埋却する。 3. 施設栽培では開口部を防虫ネット(0.4mm目合い)で被覆するとアザミウマ類の侵入を軽減できる。	1. 本ウイルスはアザミウマ類により伝搬される。 2. TSWV、INSV感染の有無はイムノクロマト法により簡易診断できる。 3. カラーピーマンにおける県内の発生状況と病徴は、農業農村支援センターへ問い合わせる。
ネコブ センチュウ	定 植 前	1. 土壌線虫の項を参照する。	

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
アブラムシ類	定 植 時	1. 施設栽培では、施設の開口部を防虫ネット（0.8mm目合い）で被覆する。 2. シルバーストライプフィルムをマルチする。	
	生 育 期 間	1. 施設栽培ではギフアブラバチ（ギフパール）を10aに250頭（ボトル1本）の割合で、1週間間隔で2回～4回放飼する。放飼方法はボトルを開栓し、施設内の直射日光の当たらない場所に静置する。 2. マラソン乳剤 2,000 倍液、ウララDFの 4,000 倍液、アドマイヤー顆粒水和剤 10,000 倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. ベストガード水溶剤 1,000～2,000 倍液、ダントツ水溶剤 2,000～4,000 倍液、アクタラ顆粒水溶剤 3,000 倍液、モスピラン顆粒水溶剤 4,000 倍液のいずれかを散布する。	1. ギフアブラバチに関して (1) ギフアブラバチは生存日数が短いので、入手後は直ちに使用し使い切る。 (2) ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモアカアブラムシに寄生するが、他のアブラムシには寄生しないので発生種に注意する。 (3) 多発してからでは効果が劣るので、発生初期に放飼をはじめめる。 (4) ギフアブラバチに対する農薬の影響に注意する。マラソン、アディオオン、ベストガード、アグリメック、アフアム、スピノエース、ディアナは影響が大きいので、放飼中の使用は控える（農研機構ギフアブラバチ利用技術マニュアル参照）。 (5) ギフアブラバチの利用は施設栽培に限る。 2. アクタラ、アドマイヤー、ダントツ、モスピランは、蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 3. ダントツは、ミツバチ、マルハナバチへの影響に注意する。 4. アドマイヤーは施設栽培に限る。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
ミナミキイロ アザミウマ	定 植 時	1. アドバンテージ粒剤を株当たり 1～2 g 植穴処理する。	1. 薬剤抵抗性発達回避のため、系統の異なる薬剤とローテーションしながら散布する。
	生 育 期 間	1. スプラサイド水和剤 1,000 倍液、マラバッサ乳剤 1,500 倍液のいずれかを散布する。	2. アドバンテージ、マラバッサは魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
ミカンキイロ アザミウマ	生 育 期 間	1. 施設栽培では開口部を防虫ネット（0.4mm 目合い）で被覆すると侵入を軽減できる。 2. アーデント水和剤 1,000 倍液を散布する。 [参考農薬] 1. コテツフロアブル 2,000 倍液を散布する。	1. アーデントは蚕毒及び魚毒に、コテツは魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 2. コテツは蚕毒に注意する。 3. コテツは品種（エース、カリフォルニアワンダー、京波、京みどり、グリーン 800 号、秀翠、ニューエースなど）により薬害を生じることがあるので、予備散布により薬害の出ないことを確認してから散布する。
アザミウマ類	生 育 期 間	1. 施設栽培では開口部を防虫ネット（0.4 mm 目合）で被覆すると、侵入を軽減できる。 2. スワルスキーカブリダニ（スワルスキー）を定植 30～40 日後に 10a 当り 25,000 頭（ボトル 1 本）の割合で放飼する。 3. モスピラン顆粒水溶剤 4,000 倍液を散布する。	1. スワルスキーに関して (1) 250ml ボトル製剤は 350～400 回振りかけることができる。放飼は、すべての株の生長点付近にボトル内容をやさしく振りかける。 (2) 放飼後 2 週間程度は、放飼した生長点付近の摘葉は控える。 (3) 放飼 2～3 週間後に葉裏を観察し、定着していない場合は追加放飼する。放飼直後の薬剤散布は控える。農薬の散布に当たっては天敵に影響の少ない薬剤を使用する。 (4) アザミウマ類の 1～2 齢幼虫を捕食するが、成虫に対する効果はない。また、比較的大型のヒラズハナアザミウマに対しては、捕食能力が低い場合がある。花や葉裏の観察、青色粘着板による誘殺を行い、アザミウマ類の発生動向に注意する。 (5) スワルスキー放飼後にアザミウマ類の増加傾向が続く場合は、薬剤防除を検討する。 (6) カブリダニ類は生存日数が短いので、入手したらすぐに全量を放飼する。 (7) スワルスキーの利用は施設栽培に限る。 2. モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
オオタバコガ	生 育 期 間	1. 施設栽培では開口部を防虫ネットで被覆すると、侵入を軽減できる。 2. アファーム乳剤、フェニックス顆粒水和剤の2,000倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. エスマルクDFの1,000倍液、マトリックフロアブル1,000倍～2,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液、スピノエース顆粒水和剤2,500～5,000倍液のいずれかを散布する。	1. 孵化幼虫が果実に食入する前に散布する。 2. オオタバコガの平年の発生時期は5月下旬から10月下旬であり、ピーマンでは6月上旬及び8月中旬以降に幼虫による食害が認められる。この時期にはフェロモントラップによる成虫の発消長を参考にして、薬剤抵抗性発達回避のため系統の異なる薬剤とローテーションしながら散布する。 3. アファームは蚕毒及び魚毒に、BT生菌製剤(エスマルク)、スピノエース、フェニックス、IGR剤(マトリック)は蚕毒に、コテツは魚毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 4. コテツは蚕毒に注意する。 5. フェニックスは水産動物(甲殻類)に影響があるので注意する。
ハダニ類	生 育 期 間	1. ダニコングフロアブル3,000倍液を散布する。	